

紹介

『日本城郭大系 11』

京都・滋賀・福井』

『日本城郭大系』（本巻18巻・別巻2巻）が刊行中である。歴史学においても即物的な研究の必要が訴えられている現在、時宜にかなった歓迎すべき企画と言えよう。

類書としては同じ出版社の『日本城郭全集』（全16巻、'66-'68）があるが、これと比べると図版・本文とも質的量的にはるかに充実しており、「城をめぐる政治史」ではなく遺構に比重を置いた記述ができるようになった点にこの間の城郭研究の進歩が窺われる。しかし、「城郭研究の決定版」を称するにはなお多くの問題点があると思われる。以下気のついた点を述べてみたい。

まず本書は京都・滋賀・福井の三府県を対象としているのだが、この組合せには特に意味があるわけではなく、内容は県ごとにばらばらである。あえて比較すれば、最も優れているのは福井県で、一乗谷を始めとする考古学的調査が生かされており、図

も多い。反対に滋賀県は新たな調査が殆ど行なわれなかった様で、編者も認める通り縄張図も少なく、戦前の郡志等に頼った部分が多い。

また、同一県内でも執筆者による相違は大きく、特に京都府でこれが目立つ。文献の扱いや政治史の叙述、縄張図の有無・精粗及び書き方などまちまちであって、城郭の存在状況を統一的に把握することを困難にしている。

城郭の排列は『城郭全集』の県別五十音順を改めて郡・市別の五十音順としたが、依然一つ一つの城郭を個別的に扱う傾向が強く、城相互の関連が把みにくい。県ごとに城郭分布図が付けられているものの、これは存在の不確実なものまで含めたすべての城郭を時代や性格の違いを無視して並べただけのもので、索引図以上の意味を持たない。これ以外に、時代・性格の違いや本城と支城の関係等をも考慮した真の分布図が必要である。古代から幕末までの城郭を、館、山城、環濠集落等の区別なしに同一レベルで扱う編集方針にも無理がある。

城郭の解説は、「城郭解説」の項に一項目として掲載したものと「その他の城郭一

覧」として最後にまとめたものとに分けられているが、これがどのような区別によるのか不明であり、同一地域に属する城が二ヶ所に分けられた結果、地域的な把握が一層困難になっている。「その他の城郭一覧」の城が索引に出ていないのも検索に不便。また、独立した一項目とした城のどれに図を入れ記述を詳しくするかといった基準もあいまいである。要するに地域の中でどの城がどんな位置を占めるか、重要であるかという判断がなされていないのであり、全体としての城郭研究になりえていないのである。

個々の城の解説にも多くの課題がある。まず、城郭の構造の分析からその性格を明らかにしていくことが城郭研究としては重要なはずだが、記述がそこまで及んでいないものは少ない。そして城郭の性格を知るには縄張図が不可欠であるが、大規模で重要と思われる城郭でもなおこれのないものがある。文章と写真だけでは城郭の全体的な理解は不可能である。地形図は城郭の正確な位置を知るためにも必要であり、他に地籍図・空中写真・代表的な絵図なども細部まで読めるものをできるだけ載せてほしい。

特に地籍図が福井県以外で活用されていないのは遺憾である。

縄張図については、縮尺、様式、断面図の有無等が不統一なこと他に、道を書いていないものが多いのも図として不完全なだけでなく実際の踏査に不便であり、登攀路の記述だけでも欲しい。総じて踏査の役に立つことがもっと考慮されてよい。

また、特に近世城郭で城下町について触れないものがあるのも問題だろう。「正保城絵図」等の近世の城絵図が城下町をも描いている通り、城と城下町は不可分のものである。中世城郭についても、交通路・市場等の要素との関連を通じて、地域におけるその個々の意味を明らかにしていく必要がある。

以上のような問題は、「研究ノート」の欄や別巻の「城郭研究入門」などである程度補なわれるだろうが、やはりそれが個々の城郭の解説に生かされていなければ意味がないと言えよう。

ともあれ、城郭研究自体まだまだ未熟であるし、およそこうした類の書物に「決定版」などあり得ない。本書もまた今後の改訂のためのたたき台と見なすべきものであ

り、読者一人一人が本書の改訂に参加することを求められているのである。そしてその過程から地域に根ざしたより豊かな研究が生み出されるはずである。そのために、本書は広汎な読者を得なければならぬ。

(B5判 四八五頁 一九八〇年九月
新人物往來社 六八〇〇円)
(小島道裕 京都大学大学院生)

Fritz Blauch

Staat und Verbände in Deutschland zwischen 1871 und 1945

近年、ドイツ近現代史の研究においては、利益団体の活動史は一つの重要な作業領域となっている。というのも、帝政期以降のドイツ史の基本線を、ユニカー大土地所有と石炭・鉄鋼を中心とする重工業との同盟と共同支配に求める見解が定着して以来、利益団体の活動、とりわけ政策決定過程へのその影響力の分析は、そのような見解を検証するうえでの格好の場を提供するからである。こうして工業家中央連盟に関するケルブレの研究や、農業者同盟についてのブルーの労作を初めとして、われわれはこ

の分野ですでにかなり多数の成果を手にするようになってきているのだが、このような蓄積を踏まえて、帝政成立からナチズムの崩壊に至る期間の、国家と利益団体の関係を概観しようとするのが本書である。

著者によれば、このドイツ近現代史の中でも最も問題を孕んでいる時期において、一貫して「国家に対する利益諸団体の支配」が確認される。この支配は通例、公共の監視を避けて秘密裡に貫徹・維持されていたので、同時代人の眼には映らず、その実態はアルヒーフ等の史料を現在精査してようやく明らかになるのである。そしてその場合にも、個々の事例を孤立的に扱うだけでは充分でなく、利益団体の支配の確立と国家の従属化という、大きな過程の一環と捉えることが重要なのである。こうして本書の野心的な構想が立てられているわけだが、約一五〇頁の容量でこの課題を果たすのは至難の技であり、そのため著者は若干の制約を認めている。第一に本書は概観書として、叙述はすべて二次的な研究文献を典拠としており、自ら史料を操作した後の成果ではないこと、第二に、このように既存のケーススタディに依拠しているため、現在